

親鸞仏教センター主任研究員定例講座（第Ⅰ期）

『歎異抄』思想の解明

第6回 『歎異抄』の序（3）―「抄」

加来 雄之

はじめに

・前回までのまとめ

『歎異抄』は、親鸞の言行録として製作されたものでも、親鸞思想の入門書として製作されたものでもない。『歎異抄』は、ただ親鸞の仰せに正しく出遇うことを課題として記されたのである。

この課題を果たすために、『歎異抄』の本文は、いわゆる垂師訓篇（十章）、誠異義篇（八章）、述懐篇という三部によって構成される。

『歎異抄』の著者・唯円は、その課題を果たすために、親鸞その人が先師・法然の仰せをどのように受けとめたかの語りを記すのである。

『歎異抄』は、現代の私たちにとっても、私たちが親鸞聖人の言葉に出遇って行こうとするときの指標となる。『歎異抄』は、真宗を学ぶことの本質を問い直してくれる。

『歎異抄』の漢文序は、題号の「歎異」と「抄」の由来の縁を示すものであり、またその中に三部で構成される原型を見いだすことができる。

・前回の質問に答えて

蓮如書写本『歎異抄』「〔漢文序〕」の訓読

| 漢文（白文）                                                                               | 書き下し                                                                                                                                                                                  |
|--------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 竊廻愚案<br>粗勘古今<br>歎異先師口伝之真信<br>思有後学相統之疑惑<br>幸不依有縁知識者<br>争得入易行一門哉<br>全以自見之覚悟<br>莫乱他力之宗旨 | 竊かに愚案を廻（めぐ）らして、<br>粗（ほぼ）、古今を勘（かんが）うるに、<br>先師の口伝の真信に異なることを歎き、<br>後学相統の疑惑有ることを思ふに、<br>幸ひに有縁の知識に依らずば、<br>争（いかで）か易行の一門に入ることを得ん哉（や）。<br>全く自見の <u>覚語</u> を以て、<br>他力の宗旨を <u>乱</u> ること莫（な）かれ。 |
| 仍、故親鸞聖人御物語之趣<br>所留耳底、聊注之<br>偏為散同心行者之不審也<br>云々                                        | 仍て、故親鸞聖人の御物語の趣き、<br>耳の底に <u>留むる所</u> 、聊か之（これ）を注（しる）す。<br>偏へに同心行者の不審を散ぜんが為なり。<br>と云々。                                                                                                  |

（『浄典全二』1053頁、『真宗聖典』626頁）

【本文校異】

- 1 語——**別**本「悟」
- 2 乱（みだ）る——永正本振仮名「みだるること」
- 3 留（とど）むる——**別**本振仮名「とどまる」

### 【漢文序の構造的理解】

私は安良岡氏の見解を参照にして、かつ文章の形態から、「漢文序」を大きく3段落に分けて理解したい。

| 「歎異」——第一段落 『歎異抄』述作の課題              |                                                           |
|------------------------------------|-----------------------------------------------------------|
| ①竊回愚案<br>②粗勘古今                     | 述作の姿勢<br>①述作をつらぬく態度<br>②述作をつらぬく課題を見いだす方法                  |
| ③歎異先師口伝之真信<br>④思有後学相續之疑惑           | 「今」の課題的状况<br>③「今」の課題的状况の原因を歎き<br>④「今」の課題的状况の現象を思う         |
| ⑤幸不依有縁知識者争入易行一門哉<br>⑥全以自見覚語莫乱他力之宗旨 | 「今」の問題的状况を解決するための指針<br>⑤ 勸励すべき指針（師訓十章）<br>⑥ 批判すべき指針（異義八章） |
| 「抄」——第二段落 『歎異抄』述作の方法               |                                                           |
| ⑦仍故親鸞聖人御物語之趣所留耳底注之<br>⑧偏為散同心行者之不審也 | ⑦述作の方法<br>⑧述作の目的・理由                                       |
| 第三段落                               |                                                           |
| ⑨云云                                |                                                           |

⇒漢文序には『歎異抄』の構成の原質が示されている。

- ①② 総説（述懐篇）との対応
- ③⑤ 前十章（垂師訓篇）との対応 先師口伝の真信 有縁の知識
- ④⑥ 後八章（誠異義篇）との対応 後学相續の疑惑 自見の覚語
- ⑦⑧ 總結（述懐篇）との対応

=====

## 【漢文序 2】

仍て、故親鸞聖人の御物語の趣き、耳の底に留むる所、聊か之（これ）を注（しる）す。  
偏へに同心行者の不審を散ぜんが為なりと云々。

| 「抄」——第二段落 『歎異抄』述作の方法 |           |
|----------------------|-----------|
| ⑦仍故親鸞聖人御物語之趣所留耳底注之   | ⑦述作の方法    |
| ⑧偏為散同心行者之不審也         | ⑧述作の目的・理由 |
| 第三段落                 |           |
| ⑨云云                  |           |

## II 本文読解

### 【本文】

仍故親鸞聖人御物語之趣                      よて、故・親鸞聖人の御物語の趣、  
所留耳底聊注之                      耳の底に留むる所、いささか之を注す。

### 【安良岡訳】

それ故に、亡き親鸞聖人がお話しになったことのご趣旨で、耳の奥底にはっきりと記憶に残していることを、わずかばかり書き記す次第である。（『全講読』三四頁）

### 【主題】

安良岡は、第一段③④における念仏宗門の問題点、第二段落⑤⑥におけるその解決策の指摘を経て、この第三段落⑦⑧においては、その問題点を解決するための必須の手段として「故親鸞聖人御物語之趣」にそれを見出しているとする。

私は題目の「抄」の由来の縁をあかすものとして理解したい。

### 【考察】

#### 【問い「仍」から文体が変わるのは何故だろうか。】

・私はここからは題号の「抄」があらわす内容に当たると考える。つまりこれまでは「歎異」という他力念仏宗における普遍的な課題がおさえられていたが、ここからは唯円という個人における述作の方法について述べる。

・「仍て（よて）」：①接続。よりて。そういうわけで。そのために。（広辞苑）。「よりて」と訓む漢字には「仍」の他にも「因」「由」「依」などがある。「仍」の漢字の意味からすると、① {動} よる。ねばりついて離れない。 なずむ。「仍旧貫＝旧貫ニ仍ル」〔→論語〕② {動・副} かさなる。かさねて。もとの物事につけ加わる。 また、そのさま。さらに。そのうえ。などの意味があり、これまでの文を受けて展開することを示すのであろう。

・『教行信証』後序には、「仍（よん）で悲喜の涙を抑えて由来の縁を註〔しる〕す」とある。

【問い 「故親鸞聖人御物語之趣」という表現について】

・後述の「古親鸞ノ オホセコト サフラヒシ オモムキ 百分カー カタハシハカリヲモ オモヒイテマヒラセテ カキツケサフラウナリ」との呼応は？

・「先師」と「故親鸞聖人」との関係は？ 第一段落で検討したように、唯円にとっての「先師」は親鸞、親鸞にとっての「先師」は法然を指す。唯円にとっての先師が故親鸞聖人と押さえられている。

・「物語」と「オホセ」

まず「ものがたり」とは、古語辞書によれば、「①四方山ばなし。雑談。②乳児の、まだ言葉にならない声。③物語の草子。」（岩波古語）とあり、ここでの意味には合致しない。ここでの「物語」の意味は何か。

・「もの」は、「《形があって手に触れることのできる物体をはじめとして、広く出来事一般まで、人間が対象として関知・認識しうるものすべて、コトが時間の経過とともに進行する行為をいうのが原義であるに対して、モノは推移変動の観念を含まない。むしろ変動のない対象の意から転じて、既定の事実、避けがたいさだめ、不変の慣習・法則の意を表す。》また接頭のモノは漠然と一般的存在として把えた表現をすることがあるから、①なにかにつけて、②何となく。の意をもつとされる。

「かたり」は《カタはカタドリ（象）のカタ、型のカタと同根。出来事を模して相手にその一部始終を聞かせるのが原義。類義語のツゲ（告）は知らせる意。イヒ（言）は口にする意。ノリ（宣）は神聖なこととして口にする意。ハナシはおしゃべりをする意で室町時代から使われるようになった。》①出来事をありのままに相手に聞かせる。②筋のある説話や噺をする。」（岩波古語）

【問い 『歎異抄』における「趣」という表現がもつ意味】

この「趣」という字に『歎異抄』の課題がよく表現されている。物語の表面的な意味ではなく、その物語が私たちをどこに連れて行こうとしているのかという「趣」に思いを致すこと。

例えば『口伝鈔』では「本願寺の鸞聖人、如信上人に対しましまして、おりおりの御物語の条々」（聖典六四九頁）とあり、「趣」という一字がない。このことは、『歎異抄』の著者にとって「趣」という言葉に強い思いがあるを傍証する。

「趣」の訓としての「おもむき」は、「面向き・赴き」動詞《強制されることもなく、顔がそちらに向く意。転じて、心が向く、そちらへ行く、同意する意。》名詞《それとなく示されている心持。自然に気持ちの向く方、また、その気持ちの具体化されたものの意。》①心のありかた。②意味③様子、調子。④風情。おもしろみ。」（岩波古語）を意味する。

【問い 「所留耳底」の訓み方について】

・「耳の底に留まる」のか、「耳の底に留むる」（蓮如本）のか。安良岡は蓮如本にしたがって訳している。

・「留まる」は自動詞〔自ラ四〕、「留むる」は他動詞〔他マ下二〕。「留むる」と訓むと、編者の意志が入り、留めてきたことが強調される。忘れられないではなく、忘れまいとしてきたということ。

・「作者自身の「耳の底に留ま」って、今、現に作者自身に教えつづける、いわば、いのちある教言の事実をもって、呼びかけようとするのであります。「今現在説法」(『阿弥陀経』)という聖語がありますが、」(広瀬杲『歎異抄のこころ』二五頁)

ここに注(しる)されるのは、「耳の底に留まる」「物語」ではなく、「耳の底に留むる」「物語之趣」である。

### 【問い 「聊注之」について】

・「聊リョウ」は、なんとか。とりあえず。あえて少しだけするの意。

・「之を注(しる)す」とはどのようなことか。

「注」は、「⑤ {動・名} しるす。書きとめる。記載する。また、書きとめたもの。

〈同義語〉→註。「注記」⑥チュウス。{動} 文章の意味を解釈したり説明したりする。

〈同義語〉→註。」(漢字源)

従来、「注之」は親鸞の物語を書きとどめただけだと理解されている。「しるす」という訓からすれば一応正しい。しかし、「之趣」という言葉に注目すると、「之を注す」ということには、ただ書きとめるだけではなく、「チュウス」「註」という解釈・説明という意味も含んでいると受けとめることもできるのではないか。そうであれば、「之を注す」、つまり「抄」という言葉には、親鸞聖人の言葉だけではなく、唯円の受けとめ、解説も含まれることになるだろう。

### 【問い「文類」と「抄」について】

・「歎異」が教学的課題であれば、「抄」は、その課題を実践していく教学的方法である。つまり「抄」は親鸞聖人の言葉を思い出すままに単に抜き出したものではない。

「抄」は、『歎異抄』の著者が考え抜いて選んだ方法である。覚えている多くの親鸞聖人の言葉の中から、「歎異」という課題に応じるときに、決して忘れてはならない言葉だけを、厳選して、この『歎異抄』と名づける著述の中に、三箇所に分けて適切に配列することが「抄」という営みなのであろう。(本文の一つ書きの序数)

### 【加来試訳】

|                                                                 |
|-----------------------------------------------------------------|
| だからこそ、亡くなられた親鸞聖人がお話しになったことの趣旨で、〔私の〕耳の底にとどめていることを、少しばかりそれを書きしるす。 |
|-----------------------------------------------------------------|

### 【本文】

偏為散同心行者之不審也  
云々

ひとえに同心行者の不審を散ぜんがためなり  
(とうんぬん。)

### 【安良岡訳】

これは、ひたすらに、信心を同じくする、念仏を行ずる人々の疑問を晴らそうがためである。(安良岡『全講読』三四頁)

### 【考察】

#### 【問い 「偏に」とはどのような態度か】

「偏」…ひたすらに、それだけ、他にもいろいろあるけれども一つのことに注意を向けるということ。唯や専との違いは？

#### 【問い 「同心行者」とはどのような人びとか。】

「同心」とは「心を同じくする」の意味である。「同心」であって「同信」ではない。『歎異抄』は、基本的に信について一か異であって、「同じ」という表現はもちいない。たとえば「おなじころざしにして、あゆみを遼遠の洛陽にはげまし、信をひとつにして」(第十章)の「おなじころざし」にあたるものとして訳した。また、もし「信をひとつ」にした人びとであれば不審を散ずる必要はない。

・「行者」とは、「〔専修念仏を〕行ずる者〔たち〕」の意味であろう。後述には「一室の行者」とある。「歎異」ということは傍観者には出てこない精神である。

・「信者」と「行者」について。

#### 【問い 「不審」とはどのような問題か。】

・「不審」とは、つまびらかではないことであり、はっきりしないこと。『歎異抄』では、不審と疑惑を分けて考える必要がある。「不審」は、「不信」でもなく「疑惑」ではない。疑っているわけではないが、はっきりとしないことである。また問題があることはわかるが、その問題がはっきりしていないことである。教えと身の事実との関係が、はっきりしないために、惑わされたり執着したりする心理をあらわすのであろう。「疑」は仏教学の定義では「猶豫」であるが、不審は猶豫ではなく、よく分からない、はっきりしないということである。「疑惑」は、信じるか信じないかに惑うことであるが、不審は信じているけれども明証がないということであろう。「不審」は、あえていえば「遅慮」に当たるのではないか。

「不審」は、『歎異抄』第九章にも出るが、そこでは親鸞は「不審」に対して「よくよく案じみれば」という態度で応えている。つまり「不審を散らす」とはよくよく案じみることによってはっきりさせることである。

・「散ぜん」の「散」とは、問題を消失させることを意味しているのではない。雲散（雲がちりぢりに散るように）というが、雲が散れば景色がはっきりみえるように、問題をバラバラに解体して、問題の本質がよく見通せるようになったことであろう。

・問題はあっても、そのことの本質が、つまりははっきりしていなかった問題がはっきりと受けとめることができるようになることである。たとえば第九章でいえば、煩惱

がなくなるわけではないが、煩悩の所為ということがはっきりすればよいということである。

不審とは、疑っているのではないが、慮りがあってはっきりとしないことであろう。ではそれをどのように解決すればよいか。第九章によればその方法は、「よくよく案じ」ることである。そのことによって、仏のかねて知ろしめしたおほせを「知れ」たならば、つまり凡夫という機・法の自覚が明確になるならば、「いよいよたのもしろくなる」。

**【問い 結びの「也」について】**

・「也」は、断定し言い切ることを示す字である。

**【問い 漢文序の結びに置かれた「云々」とはどのような意味をもつのか】**

私は古田武彦氏の見解を参考にして唯円が歎異抄を作る以前に作成していた題号を作成するときに作った、もしくは参考にしたメモ書を引き抜いてきたものとして理解したい。

**【加来試訳】**

〔それは〕ひたすら、こころざしを同じくして〔専修念仏を〕行ずる人びとの〔いだいている〕不審〔の雲〕を〔バラバラに〕散らそうとするためである」。

〔題号についての私の覚え書きには、〕このようにある。